# 津高同窓会報

発行所
津市新町3丁目1－1
津高等学校
同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

## 無きたら礎岡し

## 「水と油」

同窓会長 川喜田 貞久（昭和27年卒）

会長として約一年が経過し、漸く諸行事が一巡しました。なるほど、津高の同窓会とはこういうものだったのか、と思っているところです。ドラッカーという戦後一貫して本を出す度に注目を集めてきた学者がいます。この人の言葉の中に「21世紀はボランティア団体のガヴァナンス（統治システム）が重要になる」というものがあります。

最近幾つかのボランティア団体に関係して、ドラッカーの先見性に改めて敬意を表しているのです。ボランティアの発展途上国とも言えそうな今の日本では大切な言葉だと思います。善意だから許される、こういう甘えが、団体を堕落させ、動機さえも危なくすると思うからです。少しニュアンスが違いますが、同窓会も似たところがあると思いませんか。この点ではすっかり安心しました。津高の同窓会は先ず代議員会があり、年度の幹事が責任者、その上に常任幹事会があって、更に正副会長会議があります。その人選も民主的に行われています。こういう組織と意思決定のプロセスがある同窓会は滅多にないでしょう。津高の同窓会は凄いという声はこんなことからも出てくるのだと思います。

話は変わって、表題の「水と油」です。最近、私の頭から去らないのは人類はあと何年生き長らえることが出来るだろうか、という疑問です。余りにも漠然としているので、百年単位か千年単位か万年単位かと考えると少し具体的になります。持続可能な発展、という言葉を見かけますが、この意味は人類が持続可能な、という意味です。20世紀は石油、21世紀は水とも言われます。人類の持続を考えると、資源は再生産可能な範囲でしか使ってはなりません。資源を世代を超えて公平に使えるのがベストですが、果たして人類は自分さえ良ければいい、後から来る人達のことは知らないよ、という世界から抜け出せるでしょうか。現実には世界的大企業による水資源の買い占めが始まっているようです。同窓会にイデオロギーは不要ですが、こんな事なら共通の価値観を持つことに繋がってもいいのではないでしょうか。

タイトル・書「創立百年記念讃歌」より
千草光洞（昭和23年卒）
絵「県境の道」 田村公男（昭和46年卒）

創立一二五周年記念行事 …2・3
恩師短信 …4
応援歌について …5
懐い出に生きる津中学 …5
新制津高発足のころ …5
いい日でした …6
アメリカ旅行記 …7
卒寿を迎えて …7
昭和十八年卒業の私たち …8
わが青春 …8
青春・バスケット …9
四十年余の歳月を振り返って …9
親子四代の「母校」 …10
サウジな日々 …11
「クラブ活動」今昔物語 …12
津高校進路事情 …13
修学旅行 …14
各地で同窓会開催 …14

# 創立一二五周年記念行事

## ご挨拶

学校長　水越利幸

会員の皆様には、ご健勝にて、ご活躍のこととお慶び申し上げます。

平素は、本校教育活動に暖かいご支援、ご協力を賜り、心から感謝いたします。

今年も八月、本部での同窓パーティーは、「なつかしい出会い　あたらしい再会」をテーマに約八百人の会員の皆様がお集まりになり、例年同様に皆さん方のパワーに圧倒されました。特に九九歳の方が参加されていることをお聞きして、感激しました。

さて、今年度から、学校経営改革に取り組むことになっていますが、本校の学校経営の改革方針では、「本校は、創立以来『自主・自律』の精神を校風として、常に清新の気風に満ち、生徒一人ひとりの個性・特性・思考及び行動などが尊重される教育活動を展開してきました。これからもこれらのことを継承し、主体的に学ぶ姿勢や多様な学問への旺盛な探求心を培い、想像力・表現力・判断力等に富んだバランスのとれた人格の形成を図り、地域社会や国際社会の発展に貢献しうる心身ともに逞しい人間の育成を目指します。そのため、私たちは高い識見、豊かな個性、熱い情熱を持って、これらに応える教育活動を展開します」と目指す学校像を示しました。この基本理念のもと、中長期的な重点目標を示すとともに、今年度の行動計画を具体的にして、実践することとしています。このことによって、生徒、保護者、地域の方々により満足できる教育が提供していけるものと考えます。そして、年度末には、今年度の行動計画を洗い直して次年度に反映します。

これらのことを継続することによって、誰からも高く評価され、信頼される学校の仕組みを学校自らが創り上げていくことになります。今後の本校の変容を見守っていただきたいと思います。

一方、ハード面では五月に旧図書館棟を取り壊し、その跡地に理科棟を新築いたします。昨年度から理科の各先生に知恵をいただいて設計等を行ってきました。この九月から基礎工事が始まりました。来年秋には新しい校舎が出来上がる予定ですので是非ご覧いただきたいと思います。

明治十三年の開校以来、来年で創立一二五周年を迎えることとなり、これを記念して以下の行事を行うこととなりました。

創立百周年以来、節目ごとに行ってきた行事をさらに発展させてまいりたいと考えております。多数の会員の皆様のご参加をお願いいたします。

## ★第五回津高同窓会美術展★

創立一二五周年記念行事の一つとして第五回津高同窓会美術展を開催いたします。今まで以上の多数のご参加をお願いいたします。

**会　場**　三重県総合文化センター
第一ギャラリー・第二ギャラリー
（〒514-0061　津市一身田上津部田1234　TEL（059）233-1105）

**会　期**　平成十七年七月二十七日（水）～七月三十一日（日）
【午前九時三十分～午後五時まで、但し最終日七月三十一日（日）は午後三時まで】

**展示作品**
第一部（日本画・洋画）
第二部（彫塑・立体造形）
第三部（デザイン・工芸）
第四部（写真　※デジタル可、ガラス不可）
第五部（書）
の五部門で出品要項により出品された作品を展示します。

**出品料**　三千円

**出品申込みについて**
・左記申込書をコピーした後、必要事項をご記入いただき、ハガキに貼って美術展事務局に送付いただくか、

ファックスでお申込み下さい。申込みが到着次第、詳細要項・正式申込書をお送りします。

・申込書締切は二月末日、正式申込書締切は三月末日とします。

○美術展事務局
〒514-0021　津市万町津一八一
鈴木　一生（昭和二十六年卒）
TEL・FAX（059）228-2057
※ご質問等も右記事務局にお問い合わせ下さい。

創立一二五周年記念　第五回津高同窓会美術展　申込書

ご芳名

ご住所　〒

TEL

卒業年（T・S・H）　年卒

出品部門
第一部（日本画・洋画）　第二部（彫塑・立体造形）
第三部（デザイン・工芸）　第四部（写真　※デジタル可、ガラス不可）
第五部（書）

## ★第四回ゴルフコンペ★

平成十七年五月十五日（日）
富士エクセレント倶楽部伊勢大鷲ゴルフ場

創立一二五周年記念行事の一つとして第四回津高同窓会ゴルフコンペを開催いたします。

第一回、二回、三回のゴルフコンペには、多数の方々にご参加いただき、盛大に開催することができました。

今回も同窓生の親睦を図り、併せて参加者皆様の健康増進を図ることを目的といたします。

会員の皆様には多数ご参加いただきますよう、心からお待ちいたしております。

○期　日　平成十七年五月十五日（日）
○場　所　富士エクセレント倶楽部
伊勢大鷲ゴルフ場
久居市稲葉町一四九七番地
TEL（059）252-2050
FAX（059）252-2626
○会　費　五、〇〇〇円（プレー費別）
○競技方法
十八ホールストロークプレー
（ダブルペリア方式）

●クラス分け
松　組　六十歳以上の男性
竹　組　六十歳未満の男性
梅　組　女性

○申込み方法
官製ハガキに左記の事項をご記入の上、お申し込み下さい。
・氏名・住所・電話番号・性別
・生年月日・卒業年度・HC
※ハガキ一枚につき一名のご応募でお願いします。なお、同じ組で回りたい方がいらっしゃいましたら、その旨を明記して下さい。

○その他
・定員　百二十名
・申込み締切
平成十七年二月二十八日

お問い合せ・お申込み先
津高同窓会事務局
〒514-0042
津市新町三丁目一一
TEL・FAX（059）229-7331

## ★記念旅行★

「麗しき世界遺産紀行東欧周遊9日間」
平成十七年八月二十三日～八月三十一日

母校創立一二五周年の記念旅行を同窓会後援のもとにジェイティービーが企画いたしました。

久し振りの再会を楽しみに旧交を温めたいと思います。ご夫婦お友達をお誘いいただきご参加下さい。

旅行日程は左記の通りです。

「麗しき世界遺産紀行東欧周遊9日間」の旅

ブルガリア・ルーマニア・東欧を代表する世界遺産を巡ります。多彩な名物料理を満喫する全食事付きです。

日程は平成十七年八月二十三日～八月三十一日の九日間です。尚、詳細は別紙案内書の通りです。

お申し込み・お問い合わせはジェイティービー津支店へお願いします。

## ★同窓会員名簿発刊★

すでにご案内の通り、母校創立一二五周年記念事業の一つとして、津高同窓会員名簿を発刊いたします。

発刊予定は平成十七年三月で、株式会社サラトのお世話で現在進めております。

ご購入を宜しくお願いいたします。

《ご注意ください》

同窓会とは、正式な委託契約の無い業者が勝手に類似の『名簿発行』を企画し、会員の皆様方にハガキ、電話等により案内や販売を行う事がありますのでご注意願います。

判断に迷われた場合は、以下の点をご確認ください。

・返信先が同窓会、または㈱サラト宛住所になっているか。
・電話での案内については、㈱サラト以外は委託しておりません。

なお、ご質問、お問い合わせ用の専用電話を設置しております。是非ご利用下さい。

0120-981-624
受付No.41204（通話料無料）

お申込み先
津高同窓会事務局
〒514-0042
津市新町三丁目一一
TEL・FAX（059）229-7331

# 恩師短信

## 津高での思い出と近況

長瀬　修

昭和四十六年四月から九年間、津高で勤務させて頂きました。当時、高校生は世に言う〝受験地獄〟の真只中におかれておりました。しかし津高生は受験勉強だけにとらわれることなく、クラブ活動や生徒会活動にも積極的に参加していました。暗くなるまでクラブでの練習、帰宅後疲れた体に鞭打って勉強に励み、見事に自分の希望する大学に入学する生徒が数多くいました。まさに文武両道、二兎を追い、二兎を得る生徒も珍しくありませんでした。校内には自主と自律の精神が漲り、生徒は個性豊かで津高生であることの誇りと自信に満ち、ゆとりすら感じることができました。やがて入試に学校群制度が導入され、環境も少し変わりましたが生徒たちのこの気風と校風はそのまま受け継がれていったように思います。また最初で最後の東北方面への修学旅行が実施されたのもこの頃でした。私事では、県教委、文部省そして同僚たちのご支援で、アメリカのミシガン大学とイギリスのイーストアングリア大学でと二度に亘り英語研修に参加させて頂き、今でも感謝しております。思い出は尽きません。津高での九年間で得た数々の貴重な体験はその後の私の生活に大きな糧となりました。

お陰様で私も杜甫の詩中の句にあります「人生七十古来稀なり」の古稀を迎えることになります。先人の言った「人は年を重ねて老ゆるものではなく、愛と希望と情熱を失った時に老ゆるのである」という言葉に共感し、まだまだ老いることなく、愚妻と共に国内外旅行や家庭菜園などを楽しみ、「日々是好日」と悔いることのない充実した日々を送っています。

## 気骨、反骨

梶　三郎

「息子が大学へ進学するまでは、テレビはとりません」

私が津高にいた頃の同僚に、こう言い切った女先生がいた。息子は見事東大に合格した。それを自慢するような女先生ではなかった。こういう母親が今の時代にもいてくれても良いと思う。

卒業式の真っ最中、校長式辞が粛々と進行していた。その時、「ナンセンス！」と大声を張り上げた生徒がいた。学生運動華やかなりし頃のことだった。私は複雑な気持ちで式場を出たことを思い出す。

今の時代、猫も杓子も携帯電話だ。電車の中だろうと、会議中だろうと、お構いなしにかかってくる。受けた手合いは、まるでバネ仕掛けの人形のように反応する。何をそんなに急いで話す必要があるのか、不思議で仕方がない。

携帯を耳に当て、横断歩道を渡りながら大声で喋っている中年のオッサンを見ると、何だか気の毒になる。電車の中でメールか何か知らんが、携帯をもて遊んでいる女子高生。よく見る光景だ。

テレビをとらなかった女先生じゃないが、携帯なんて絶対持たんぞ、という高校生がいてくれてもよいと思うのだが。

二月十四日はバレンタインデイだ。この日、義理チョコだか何だか知らないが、女の子がむやみやたらに同僚や上司の男性にプレゼントするという妙な風潮がある。キリスト教信者でもないのに、何という愚かな行為か、と呆れ返る。そのお返しにホワイトデイだ、と言うに至っては、まさに白痴としか言いようがない。

## コートでの回想

瀬古　規矩哉

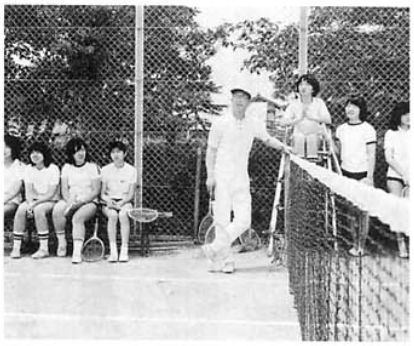
九年間テニス部顧問の中で、昭和五十一～五十三年のことを点描しよう。

合宿で学校に泊まっていた。早朝散策して校門まで来ると、校門前の通路で草をとり、落ち葉を掃いている婦人がいた。箒や袋を持ってきての作業である。わずかな時間、おそらく十分程度の作業であるが、その様子からみて、毎朝している行為と推察した。嬉しい気持ちになり、部員達と真夏の太陽の下でコートの除草をした。時が経つにつれて、この婦人の小さな行為が一層思い出された。

学校での練習はもちろん対外試合でも、ミスショットでネットにひっかけたボールは、自分のものは云うまでもなく相手のものであっても、素早くしかも気持ちよく取りに行く女子がいた。マナーのしっかりした選手の一人であった。家での躾もしっかりしているんだろうと、つい想像したくなった。この学校にはそういった意味での良い選手に恵まれていた。

合格発表直後からコートで練習している男子達がいた。怪我をしないでくれと念じつつ、入学式が待ち遠しかった。そんな男子生徒達の中にフットワークのすばらしい生徒がいた。一年の夏には県大会ベスト16にまで成長し、三年時にはインターハイに出場した。部きっての逸材であった。

桜花に染まった四月のコートとそこに集まった部員の面々を思い出す機会を与えていただき感謝します。



# 応援歌について

吉田　榮一（昭和14年卒）

今でも歌われているのであろうか？骨を貫く烈風の　という応援歌がある。白扇飛ばす三冬に　と続く。

三冬というのは

孟冬（陰暦十月）

仲冬（陰暦十一月）

手冬（陰暦十二月）の総称

又は　三度の冬　三年の意味とある。

（日本国語大辞典　小学館）より要するに眞冬という事だ。その冬に不似合な白い扇が飛んでいくというのはどうもおかしい。長い間疑問だった。

友人山村宏君が旧制二高（以下旧制を略す）に同じ歌があると言っていたのを思い出し調べて見た　有った。

第二高等学校歌集（昭52年版）26頁に尚志会応援歌（図南聲援の歌）

一、骨を貫く烈風の
白箭飛ばす三冬に
南を図る算成りて
血潮に躍る胸裡に
秘めたる力凝りては
山をも抜かん意気高し

二、起つべき秋今来る
燃ゆるが如き腕の
一度鐵と下る時
微塵に飛ばん敵の陣
立て立て勇士陣頭に
五城の意気を負うて立て

三、略　（明治43年）

（点を付した部分が津中応援歌と異なる部分である。）あゝ母校（津高百年誌）に依ると大正13年宮崎正寿とあるが、創作年度から明らかに二高の方が先で曲も全く同じだ。おそらく拝借詩譜であろう。

二高のは対一高戦の柔道応援歌だそうだ。そこで考えた。

白箭とは白い矢である。

二高は仙台にあった。冬は寒く白雪が白い矢が飛ぶように横なぐりに吹きすさぶ、そんな寒い冬にという意味ならわかる。

或いは高校三年は矢が飛ぶように早く過ぎる。その短い三年間にという意味にもとれる。

どちらだろうと考えて二高同窓会東京支部に問い合わせたら事務局の山本さんから「雪のふぶく寒い冬という意味でしょう。白扇では意味が通じませんね」という返事だった。

白箭が白扇に変わったのだ。明治、大正の年代は大らかだった。今の様に知的財産はうるさくなかった。寧ろよいものは積極的に拝借しようという風潮も見られた。一高の寮歌「アムール河の流血」が陸軍の「歩兵の本領」メーデーの「立て萬国の労働者」の曲に歌われた例があるのだから。

ただ、正確に拝借しないと意味がわからなくなると感じつつ、白箭飛ばす三冬にと歌って納得した。

# 憶い出に生きる津中学

石川　達也（昭和20④年卒）

津中学20④年卒業組の仲間の藤村辰夫氏が津高同窓会報第41号に『強烈な夏の憶い出』と題して当時の事情や、感慨を書いておられる。私は少し違った視点から中学の思い出を描いてみたい。その頃の津中学の先生は個性ある風貌と、知性に輝く方が多かった。他の生徒も同感だと思うが、私は当時の津中学の先生方に敬服し、強い感銘をしばしば受けたことを思い出す。ある時国史の先生が、講義中「桜田門で井伊大老は暗殺されたが、この人の評価については、いろいろな考え方がある」と、あの時代の世論とは、ひと味違う意見をさっと話された。この話は皆も記憶にあろうと思うが一年生昭和16年の授業であった。

数学の先生の、左脇に教科書を抱えて歩かれる風貌、数式を説明される鮮やかさ。太平記の前文や、漢文で出てくる格言を声高らかに音読される先生と、それに合わせ追唱する生徒。特徴ある教え方をされる英語の先生、数年前に亡くなられたが、「間違いやすいyaketaをわざとYATITTO」と発音してから、反転して正しい発音を教えられたなどなど。思い出は尽きない。

田園に囲まれた牧歌的な津中学にも戦時色が次第次第に迫ってきた。真珠湾攻撃が始まる少し前だと記憶しているが、参謀肩章を付けた将校に引率された部隊が、津中学の玄関に到着した。われわれは整列してお迎えした。この将校こそ三笠宮の凛々しいお姿であった。時移り、私はここ十数年、三笠宮を拝診している。宮様にその時の凛々しい印象を申し上げたら、あの時はまだ結婚もしていない青年将校だよと笑いながら話された。何かの御縁で50数年ぶりに再会したことになり、まことに不思議な有難い御縁と思っている。

（東京歯科大学名誉教授・本年5月31日迄学長を3期9年間務める。）

# 新制津高発足のころ

森川　治人（陳川23津高24年卒）

今は「新制」高校とは誰も言わない。いま、高校といえば新制高校に決まっている。「新制」というからには「旧制」が意外に意識されている。戦後学制改革によって、昭和二十三年五月に

「新制」津高は、旧制津中と旧制津高女が合併して発足した。その第一回生である私は、戦争をはさんで「旧制」と「新制」との両方の歴史を歩んだ一生徒として、戦後はじめて男女共学を実現した新制津高発足の歴史を、現在の母校に学ぶ後輩たちにぜひ伝えたいという想いに駆られている。

私が生まれた昭和六年は、柳条湖事件に始まる満州事変の勃発した年であった。これが「十五年戦争」の始まりであった。小学校五年生の昭和十六年、小学校はすべて国民学校に変わった。同十二月八日、太平洋戦争宣戦布告。当時の社会は戦争一色、国家総動員体制、軍国主義一辺倒の世の中であったことはいうまでもない。「真珠湾攻撃」から二年目、私が旧制中学校に入学したころ、昭和十八年はすでに日本の敗色は濃厚であった。

そして終戦。アメリカ占領軍の本土進駐、米軍の軍政が始まり三重県庁の屋上には星条旗が翻り街にはG・Iが闊歩していた。やがて新憲法・教育基本法制定、六・三・三制の新学制がスタート。世の中は百八十度転換して「平和、民主主義」一色となった。

昭和二十三年五月には、旧制津中と旧制津高女の合体による「三重県津高等学校」の第三学年に私は転入した。一つの教室に男女が机を並べて勉強するというわが国で初めての中等学校の男女共学が始まった。文部省や地方行政当局の混乱ぶりを物語る当時の津高の授業風景を二、三記そう。

その一。「体育」の授業が男女一緒に行われたことがある。体操服の男女生徒は交互に縦一列に並んで前から順番にバレーボール送りをやらされたことを鮮明に覚えている。これには生徒は辟易した。男女共学を誤って機械的に適用した例であろう。

その二。高三の「英語」のリーダーの教科書"World through English"の内容は恐ろしく難解なロックの哲学的内容が含まれていた。先生もこれには大概手を焼いていた。当時文部省は新制高校の教育内容に旧制高校レベルのものをイメージしていたためといわれている。

その三。さらに重要なことは、旧制中学生と旧制女学生との英語と数学の大きな学力格差であった。男子もまたそのことに優越感を味わっていた。学力差の原因は、旧制中学校と高等女学校とでは、修業年限とカリキュラムの格差があったためである。すなわち、修業年限は、旧制中学校は原則五年、高等女学校は原則四年であって高等女学校は一年短かった。三重県では昭和五年三月に始めて津高女が五年制となったのである。

中学校と同じ五年制をとる高等女学校とをカリキュラムの上で配当時間を比較すると、五年間で「英語」は中学校の三十四時間に対して女学校は十五時間で中学校の半分以下、「数学」は中学校の二十時間に対して女学校は丁度平分の十時間であった。また逆に女学校では「修身」は中学校の二倍であった。

また、中学校の「漢文」と「法制経済」は女学校には課されず、逆に「家事・裁縫」は女学校のみの科目とされ特に重視された。このように中学校では知的教科が重視され、高等女学校では「良妻賢母」を育てるための科目が課せられたのであった。男子に仕えて生きる女子のための男尊女卑の教育は、戦前の日本の女子教育を性格づけたのである。

# いい日でした

猪木（福喜多）艶（大正11年卒）

今年は伊賀地方も猛暑と度重なる台風、おまけに震度4の地震にまでおそわれました。

アテネオリンピックの胸のすく様な感動のそのあとで悲しいロシアの小学校のニュースが報じられ、国内のおぞましい事件の続出に胸のつまる今日この頃です。私は何十年ぶりかに陳川・三重桜・津高同窓会に嫁と一緒に出席させて頂きました。紫のTシャツの方々のテキパキした応対の中、若い方々の群れの中を会場に案内され、卒業年度を認めておりますと、お隣の方が「あれ！私の生まれた年ですわ」と仰るなど。溢れる程の会場で、川喜田同窓会長様のお話を伺い、長い年月を懐かしく紐解いておりました。突然、会長様のお話の中で「今年はなんと大正十一年卒の九十九才の…」と申され、思わず車椅子から半ば立ち上がりかけますと、湧き上がる様な拍手を頂戴し、感動致しました。嫁は三重桜と津高第一回生の過渡期、次々声をかけて下さる男女のクラスメート、木下昇様には私の同年斉藤ひさ様のご子息を紹介していただいたり、同年の親交の深かった上田（吉住）艶様の姪御様が美しい縦枠の和服姿で「何時も伯母から伺っておりました」と次々訪ねて下さり、私のお隣は一年下の米本様の御子息等々、思わぬ出会いに、感嘆の連発でした。アトラクションに小川三津先生念願の混声合唱「流浪の民」が流れて来ました。ピアノ伴奏は藤堂宣子様の由、私の同年赤塩つや様のお子様……。あとお食事は嫁のお友達が次々と運んで来て下さって、むずかしいテンポのダンスの御披露のあと、陳川・三重桜・津高の校歌の夫々の旋律は長い歴史の重みがあり、今年度のテーマ「なつかしい出会い・あたらしい再会」そのものようでございました。まるでメロンの筋のように、あっちでもこっちでも繋がり合って、三色の同窓会の得も言われぬ心の触れあいに母校よ永遠なれと思いました。大正七・八年に、時代に先駆け庭球が導入され、大塚俊夫先生に御指導を受け他校との試合に参りました事などが頭をよぎりました。伊賀への帰途、一身田街道の旧道、左側に恩師国府先生のお宅の碑を心で拝し、風力発電の風車が林立する青山峠を見やって、嫁と喋り乍ら、あっという間に伊賀に着きました。

いい日でした。ありがとうございました。

# アメリカ旅行記

中根(中根)婦美子（昭和4年卒）

昭和二十九年八月、長男一穂がアメリカへ留学する事になりました。当時は身元保証人が必要な上、直接息子へ学資を送金することが出来ず、いろいろと面倒な時代でしたが、何とか解決し、現在横浜港に係留されている氷川丸にて約一ヶ月の航海で渡米いたしました。1ドルが360円の時代、渡米後満足に送られてこない学資に苦労して、持っていたカメラを売り、またアルバイトで稼いで凌いでいたようでございます。

昭和三十九年当時、長男はスタンフォード大学に勤務しており、その五月に夫と二人で初めて渡米致しました。カリフォルニアから嫁（シンシア）と孫（ティーナ）を嫁の実家ボストンまで送り届けて、息子と私たち夫婦の三人でフォルクスワーゲンのワンボックスカーへ寝袋、キャンプ道具一式を積み込んで、当時住んでいたメンロ・パークのアパートからアメリカ一周の旅に出ました。

まず、カリフォルニアにあるヨセミテ・ナショナルパークへ地理の写真で見た大きなセコイヤの林の中を車で通り、次はロサンゼルスへ、ここで倉田たかさん（三重桜出身）とお会いして、二泊させて頂きました。倉田さんは戦前から渡米しておられ、戦後は敗戦国民として、とても口では表せない程のご苦労の中で、六人の子供を育てられ、子供さん達は夫々立派に活躍しておられます。

石灯籠を配した日本庭園があり、その後ロスに行く度に旧交を温めております。知り合った在米日本人は現在の日本人より遥かに日本人らしくて、非常に礼節を重んじられております。

旅はロスからグランドキャニオン・アリゾナ・ニューメキシコへ途中竜巻に悩まされながら砂漠の中を走り、ワシントン・ニューヨーク・ボストン・ナイアガラからカナダに入り、五大湖を通り、イエローストーン・ソルトレイクシティー・ネバダ・ユタと只々広いアメリカを実感しながら走り、二十五日間の旅を楽しみました。

息子は現在、カンベアにある州立カリフォルニア大学客員教授として過ごしております。数年前に行き来しましたが、カンベアは通年10度Cから20度Cの恵まれた土地で、太平洋が眼下に見え、鹿やうさぎが遊びに来ます。

友達や知人から長男をアメリカへよく行かせたな、寂しくないですか、と言われますが寂しくないと言ったら嘘になりますが、私は長男の希望通りアメリカに留学させて、本当によかったと思っています。

結婚して四男一女に恵まれ、五人すべて母校津高を卒業させて頂く事が出来ました。家事と育児に追い回される中で、夫々性格の違う子供達に合った育て方まで気をつけていた訳でもないのですが、何とか五人の子供達もそれなりに独立している事を考えれば自分なりの子育てで良かったのかなと思っています。

# 卒寿を迎えて

藤田(川本)久子（昭和7年卒）

昭和七年に県立津高女を卒業して早七十二年、今年卒寿を迎えました。

四年間楽しく厳しく共に学んだ友達も殆どいなくなったり、老人ホームに入居されたりで、健康に過ごしている方が少なくなり淋しくなりました。

私が受験した年から入学試験は口頭試問のみとなり、母が縫ってくれた和服を着て受験しましたが、この年から制服が和服から洋服に変わりました。スカートが長くても短くても注意されたものです。

八人兄弟で長女の私は、早く父をなくしたので一家をささえる責任が重く卒業した年の九月から銀行に勤務しました。昭和十四年に親の勧めにより従兄弟（河芸町、誓教寺住職）と結婚。慣れない田舎生活、寺の様子も分からず、厳しい義母の嫁、毎朝五時起床、夜は十二時まで和裁の仕事が続き、眠くて眠くてたまりませんでした。

昭和十八年に夫が召集され、その留守中、親の辛抱と子育てで大変でした。二十二年四月に帰ってきた夫はマラリアにかかり高熱に苦しみました。収入もない私は何とか収入を得たいものと、二十四年九月、六才、四才、一才の子供を主人の父母に預け、働く事を決心しました。明治生命月掛開拓部に面接を受け入社することが出来ました。

塔世橋から宮田橋まで焼け野原だった当時、焼けていない家々を訪問しましたが、「衣食住にことかく毎日なのに、保険どころではない」と叱られつらい毎日でした。しかし家庭を守っていく私にはどうしても収入が必要でした。朝に希望、昼に勤労、夜には感謝の精神で仕事を成功させようと努力しました。

一件の契約もない苦しい日々もありましたが、お陰様で五十四年間勤務することが出来、昨年十二月、横浜アリーナで家族と共に表彰を受け「私と明治生命」という私の人生と会社とのあゆみをセットした、ビデオが流れ、皆様の前で挨拶させて頂けたことは本当に嬉しい思い出です。在職中、同窓の皆様にもいろいろご厄介になっていることと思います。健康にめぐまれ、皆様のご協力によりここまでこられた幸せをかみしめ、感謝の気持ちで一ぱいです。

私は今も明治安田生命津北営業所特別参与として勤務しております。来年六月、満九十才を迎えるまで、何とか頑張ろうと思っております。

同窓の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

幾年の世の荒波をのりこえて
ここに迎える卒寿のよろこび
朝に紅顔夕に白骨と
なる身なり

# 昭和十八年卒業の私たち

花谷（横井）知（昭和18年卒）

私たちは、昭和十四年四月、高畑校長先生のご着任と共に、県立津高等女学校に入学しました。

校長先生は、ずっと男子校（旧制中学校）に勤務しておられたので、元気のある女学生を育てようという気迫を持っていらっしゃいました。

昭和十二年には、日支事変が勃発し、はや戦時下にありましたから、寒稽古、行進の訓練、興亜奉公日の日の丸辨当等々があり、また、昭和十五年には、皇紀二千六百年の祝典がありました。

先生方の中には、私の母も教えて頂いた竹島先生や、竹島先生の教え子の今村先生も、おみえになり、県立津高女の伝統の気風が、脈々と流れていたように思います。高畑校長先生が提唱された「張りだ、気張だ、県立だ」は、三重桜の伝統と、校長先生の教育方針とが、一体となって生まれた学校生活の指針でした。

私たちは、その指針の下で、心身共に鍛えられたのですが、日常生活では、衣食の制限が始まっており、また、結核に罹った友人があっても、特効薬もなく、卒業までに十名余りの方が亡くなるという悲しい事もありました。毎年の運動会、香良洲リレーといった学年対抗では、私たちは、一所懸命頑張ったのですが、毎回ビリでした。今思えば「ハルウララ」のような学年でした。

やがて、若い先生方の中には、出征される方もあり、昭和十六年には、大東亜戦争が勃発し、私たちは、意気高揚の心境で、勤労奉仕をしました。当時は、戦争に敗れるなどとは夢にも思えず、昭和十八年三月には、三重桜の学舎を巣立ったのでした。

その頃には、もう、家庭で花嫁修業をするような状況ではありませんでした。

衣食の統制は益々きびしくなり、学徒動員、勤労動員、学徒出陣へと戦争逐行は進み、やがて、戦況の悪化と共に、私たちは空襲に曝され、敗戦に至るまでの恐怖の日々を過ごさなければなりませんでした。空襲で亡くなられた友人や、肉親を失った友人、また家を失い、助かったけれども、惨禍を眼のあたりにしなければならなかった私たちは、恐怖の緊張状態の中で、敗戦を迎えたのでした。その時、私たちは二十才になっていました。

戦後しばらくは、戦時に劣らず衣食住の欠乏に絶えなければなりませんでした。しかし、身辺には自由の波が押し寄せてきていました。けれども、まだまだ私たちのまわりには、目に見えない古い慣習も残っていたのでした。

私たちは、夫々の道を歩き始めてはいましたが、誰もが、自由の意識と、古い慣習の狭間で、自分を見つける為の試練に耐えなければなりませんでした。

精一杯ぶざまに生きていたその頃の私たちを、支えてくれたのは、いつの間にか身に付けていた三重桜の気風だったように思えます。

やがて、クラス会、同窓会も持たれることとなり、三重桜のお互いの結びつきを深めることができるようになりました。

三重桜同窓会は、その百年の歴史を機に、津高同窓会に合流しましたが、三重桜の気風は、いまも私たちの心の中に息づいて居るように思います。

私たちは、平成十七年には、傘寿を迎えることになりますが、これからも、三重桜の気風を大切に生きてゆきたいと思っています。

# わが青春

近藤　好徳（昭和29年卒）

「あの日の甲子園」夏の甲子園出場！あの日から五十一年の歳月が流れた。半世紀たてど「無限の可能性」に挑戦した十八歳の青春が昨日の如く蘇る。昭和二十八年の夏、高校野球第三十五回大会の三岐代表として、実に三十八年ぶりの三重県からの甲子園出場であった。強打者森捕手（巨人～西武～横浜元監督）を擁する岐阜高を4対3、超高校級と言われた梶本投手（元阪急ブレーブス）の多治見工高を3対0で打ち破り甲子園への夢が実現した。特に、対岐阜高戦では主将で一番バッター（ショート）であった私は生まれて初めてレフトスタンドへ逆転ホームランを打ち、全速力でホームを駆け抜けた事が忘れられない。甲子園では、北関東代表の宇都宮工高に2対1で惜敗したが、負けて涙のない十八歳であった。

私の甲子園出場の日、近くの地蔵さんにお百度参りをしてくれた母は、八十歳で踊りの名取りになり、一昨年八十九歳の天寿を全うした。

天の川　踊って渡ると母は逝き

年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず。人の世の移り変わりをしみじみ感じるこの頃である。

「青春とは　年齢ではなく心のありかたなり」と言うが、今年は還暦野球を卒業し、古希リーグの新人として「有限の可能性」を求めて、又新しい人々との出会いを楽しみにしている。

# 青春・バスケット

浅田 剛夫（昭和36年卒）

昨年、40年以上を経て「故郷」津へ帰ってまいりました。業務に追われる中、多くの旧友から声をかけてもらい、ふるさとのありがたさをしみじみと、又、心から嬉しく思っています。真っ先にチームメイトの村木君の働きかけで、当時のバスケット部顧問、中川亮太先生にもご出席していただき、懐かしい先輩、後輩の皆様と一緒に「食事会」が開催されました。津高校卒業以来の長い空間も、時間が経過をしてゆく中、当時のさまざまなエピソードに話が及ぶや一挙に共有された想い出として、バスケットコート、部室、試合の一シーン、汗、涙、喜び、友情などとして蘇りました。今更ながら、津高における三年間が私にとってはバスケットを中心とする濃密な青春であった事を痛感いたしました。現在、企業経営の責任者でありますが、バスケット部のキャプテンとしての経験は、かけがえのない素晴しい、多くの財産を部活動にプラスして供与してもらった事も心から感謝しております。

現在、62歳でありますが、健康である事も、苦しい練習を乗り越えてきたご褒美かも知れません。話をすれば数限りがないバスケットを通じてのエピソードが想い出されますが、人生の中で忘れられない教訓があります。私たちの部は当時、二年生の時のインターハイ県予選で新設されたばかりで、一年生選手のみの四日市南高校に一回戦で敗退するという弱体チームでありました。奇しくも、その四日市南高校のバスケット部監督は、津高バスケット部の大先輩で、名選手の阿比子先生でありました。その一回戦で敗退する弱いチームであった津高バスケット部は翌年のインターハイ予選には（県優勝をかけて）優勝戦に進出するチームに成長し大変身を遂げました。同僚チームメートや、後輩選手に恵まれた事もありますが、私は時の顧問の中川亮太先生の、部の指導にかける情熱が大きな躍進の根幹であったと思っています。インターハイ出場に懸ける部員の強い想い、それは、私のキャプテンとしての責務につながり、苦しい練習に耐え、進学校としての部員の悩みを乗り越え、一年の間に屈辱的な敗戦から、優勝戦を戦うチームに変革を遂げられた最大の原動力だと信じています。先生は私達が新チームを結成したのと同時期に他校より化学の教師として転勤され、バスケット部の顧問となられましたが、バスケット選手としてのご経験はありません。一回戦敗退から、先生も戦いが始まったのです。中川先生は、夏合宿の期間、何日間か欠席をされました。後で知る事となるのですが、この間、バスケットの公式審判員としてのライセンスを取得する為に、先生は先生として、新たな挑戦の為に訓練に参加をされていたのです。スポーツはルールに通じる事が強さにつながります。公式審判員としてコート上にある先生は、監督として以外に、無形の応援をチームに与えてくださいました。一方で、日々の練習計画の策定や、チーム運営は自主性が基本であり、キャプテンに任される事も多く、後日のビジネスマン生活において、計画立案、戦略策定、意志決定などに大切な教訓を得た時間であったと感謝しています。その時、結果として優勝はできませんでしたが、強い津高バスケット部へ続くスタートになれたと自負しています。

中川先生の激励、顔を真っ赤にして指示し、生徒と一緒に悔しがり、喜ぶコート上の姿は、私の現在の企業経営におけるリーダシップのあり方である率先垂範の考え方の基本にあります。一年間の短い期間にピリのチームから優勝戦へ進出するチームとなった事は、現在取り組んでいます企業変革の挑戦に大きな自信を与えてくれています。強く想うことが大切なのです。

パストゥールの言葉である「偶然は準備のない者を助けない」の言葉を座右の銘としていますが、常にバスケットに打ち込んでいた日々の訓練が次なる準備であったのだと思います。バスケット部活動を通じての津高生活、かけがえのない青春、時空を超えて胸に残り続ける想い出。ボールの感触と共に忘れる事はありません。

（井村屋製菓㈱取締役社長）

# 四十年余の歳月を振り返って

今井 郁次（昭和37年卒）

津高等学校を昭和三十七年に卒業しましたので、早や四十年余が経とうとしています。この間、小生は極々偶に同窓会に顔を出す程度で、母校・恩師と先輩・同僚諸氏に不義理を重ねてきましたので、原稿を書くのに戸惑っているというのが正直な心境です。

大学（信州大学）進学、会社（旧電電公社）入社で故郷の津を離れたきりになっていますので、これまでの人生の三分の二は遠隔の地（大学時代を除く殆どの期間が東京）での生活ということになります。しかし、期間の長短ではなく故郷、三重県（津）の海や山で夕方暗くなるまで思い切り遊んだ少年時代、それに雨の日も風の日も自転車で通学し友と勉学（？）に勤しんだ伝統ある津高等学校での青春時代が、人生の貴重な礎となっています。

また、小生の場合は希望する大学への進学が果たせず信州の地で学生生活をスタートすることになりました。それまでは自然を、そして四季の移り変わりをそれほど心象風景として意識するような人間ではありませんでした。しかし、最も多感な青春時代を日本アルプスに囲まれた雄大な大自然の中で、春の芽吹きと新緑、秋の鮮やかな紅葉、

冬の真っ白い雪景色を目のあたりにして過ごしたことが、津の地で育まれた人間性に相俟って、人間としての成長に少なからず影響しているのだなと思うことがあります。

社会に出た頃は今と違って正に高度成長期で皆が精一杯働きました。そして、日本が、一市民の生活水準がよくなるのが実感できた時代でした。小生も社会人あるいは企業人としていろいろの人と出会い、かかわる中で実に多くのことを教えられ学ばせていただきました。振り返ってみても決して順風満帆の時ばかりではありませんでした。しかし、社会で学んだことに加えて、矢張り社会に出る前に生きてきた過程を通じて形成されたものが心の奥底にあってこそ、人生の後半の三分の二を乗り越えて来られたという気がしています。そうした心の中の支え、あるいは秘めた自負の一つが、（それほど何時も明確に意識してきたわけではありませんが）「津高等学校」であったと思います。諸先輩が永い歴史の中で津高等学校の伝統・校風を築いてくださったことに今更ながら感謝している次第です。

また、青春と高齢の狭間に出会ったサムエル・ウルマンの『青春』という詩にも幾度となく勇気付けられました。ご存知の諸氏も多いと思いますが、人間には肉体年齢と精神年齢があり、心の持ち方次第で人はずっと青春の中にいられる。そんな希望に満ち溢れた言葉が綴られている詩です。

青春とは人生のある期間ではなく
　心の持ち方をいう
バラの面差し　くれないの唇
　しなやかな手足ではなく
たくましい意志　ゆたかな想像力
　もえる情熱をさす
（中　略）
年を重ねただけで人は老いない
理想を失うときはじめて老いる
歳月は皮膚にしわを増すが
　情熱を失えば心はしぼむ
（中　略）
頭を上げ希望の波を
　とらえるかぎり
八十歳であろうと
　人は青春の中にいる

小生はこうして今日まで周りの大勢の人に支えられ、企業人として第四コーナーをまわり最終ステージに立っていると思っています。現在はNTTグループの中の会社の経営に携わっていますが、経営とは人間の営みそのものであると強く感じています。今は何千人もの社員とその家族が共に生活していることを考え少しでも恩返しができればとの気持ちで頑張っているところです。

諸先輩、同僚そして後輩の皆様のご健勝とご活躍を祈念しています。

（NTTコムウェア㈱代表取締役）

# 親子四代の「母校」

倉田　雅弘（昭和47年卒）

縁あって、昨年度母校のPTA会長を務めさせて頂きました。学校を訪れる機会も増え、約三十年ぶりの変わらぬ学び舎に、なつかしさがこみ上げて来ました。

それまで特に意識した事はなかったのですが、祖父から津高三年に在学中の息子まで、親子四代に渡ってこの学校にお世話になって来ている事に、改めて想いを深めております。

祖父が生前話していた三重一中時代の思い出の記憶を辿りますと、祖父は当時の弘田校長から「修身」を学び、後の人生に影響を受けたようでした。又、同級生に東畑精一という方がみえて、東畑さんは、後に「農業経済学の権威」（東京帝大教授）となられ、吉田茂首相からの農相就任の要請を断った事でも知られる、偉大な学者であったそうです。

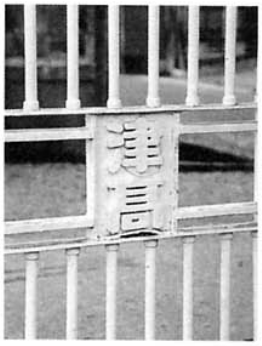
祖父は、「東畑君とは机を並べて勉学を競い合った」と自慢そうに話していました。時代は大正の初めころでしょうか。大先輩方は、真摯な態度で学問に励んでいたように思われます。

父が津中に入学したのが、開戦翌年の昭和十七年の事で、まともに学校で授業が受けられたのは最初の一年間だけで、戦火が広がるにつれて勉強どころではなくなり、農家の手伝いに行ったり、やがて学徒動員で四日市の軍需工場へ行く事になります。

そこでの話ですが、宿舎生活でのいろいろな不満が爆発して、生徒達が窓硝子を割って騒ぎ、いわゆる「反乱」を起こした事件があったそうです。一歩間違うと、国家に対する反逆行為ともとられかねない事態であったと聞いております。

戦争を知らない我々からは想像もつかない苦難の時代が、かつてこの学校にも確かにあった事を知りました。やがて終戦となり、父達は混乱の中、翌年卒業を迎える事になります。

私が津高に入学したのは、学生運動が盛りを過ぎた頃の昭和四十四年の事でした。昼休みにはビートルズの曲が流れ、反戦フォークが流行り、私達は何故勉強しなくてはならないかも含めて社会に反発を感じながらも、その一方では、いい大学に入って安定した生



活を送るといった考えも、合わせ持っていたように思います。

私は、美術の森谷先生に油絵で成績「10」を頂いた事が、嬉しく思い出されます。もっとも美術がなければ、その他の教科は五段階評価でも通用する成績でしたが。卒業間際には、時代の節目となるあの「あさま山荘事件」が起りました。

今、息子達は、携帯電話片手にラフな服装で通学しています。彼等からは、自由さ、明るさを感じますが、「頭は良いけれども自己主張がない」とも聞き及びます。自由な発想や、権力に媚びない校風は、今後も受け継いで行って欲しいと思います。

自称、頭の良かった祖父・父は、「商売人に学歴はいらない」との思いで上の学校には進みませんでしたが、大学進学が当然となってから、私も息子も勉強の出来が良くないのは、何とも皮肉なものであります。

明治以降、日本の歴史と共に歩んで来た母校ですが、不透明な時代と言われている現在において、その未来は予測しにくくなっています。果たして「次の世代」が母校で学ぶ頃は、どんな時代になっているのでしょうか。見届ける事が出来れば幸いです。

世代を越えて皆様方の集う「同窓パーティー」は、来年、私達の学年が主担当をさせて頂きます。皆様方との出合いを楽しみにしております。

（平成15年度津高PTA会長）

# サウジな日々

紺野　貴史（昭和61年卒）

小学校に入学したばかりの頃、母親と一緒に向かった近くのスーパーで、その日はなぜかトイレットペーパーの包みを別に持たされ、レジに並んだ記憶が残っています。オイルショックでした。それから時は流れ、三十年。どういう運命の定めなのか、私はその石油戦略を主導したOPECの盟主、サウジアラビアの首都リヤドにいます。世界最大の産油国であると同時に、メッカ、メディーナを有し、巡礼月には世界中から二百万人もの巡礼者が訪れるイスラム教の聖地、はたまた最近は頻発するテロ事件で日本のニュースでもよく取り上げられるこの国ですが、生活してみて分かるこの国の一端をご紹介してみたいと思います。

中東は暑い、とイメージされる通り、真夏には50度Cを超えることがあります。50度Cを超える暑さというのは、もはや暑いというよりも日差しが肌に突き刺さって痛く、十分も外を歩くと頭痛がしてきます。生命の存在を拒絶する暑さです。そういう訳で、日中はモグラのように日差しを避け、クーラーの効いた部屋で閉じこもるか、または昼夜逆転させた生活を送るか、お金のある人は欧州などに二ヶ月程度避暑に出かけるといった過ごし方をすることになります。二ヶ月も遊んでいて大丈夫かと心配になったりしますが、サウジ社会は混乱に陥ることもなく淡々と日々は過ぎていきます。逆に誰もが滞在したがらない夏ですので、この時期、仕事の関係で遠方から訪問したりすると「この夏に訪問してくれる友人こそ、本当にサウジのことを考えてくれる友人だ」と思わぬ歓迎を受けたりします。その一方で、湿度は数%しかありません。お陰で、汗だくになることはないし、おかき、のり等は放っておいても湿気りません。あまりに乾燥しているため、気温は高いはずなのに泳いだ後プールから出るとすぐに寒さを感じますし、西瓜を切って外に置いておくと冷えてちょうど食べ頃になる、など不思議な出来事が起ります（気化熱のせいです）。

サッカー場で記念撮影

気候や風土はその国特有の生活のリズムを作り、サウジにはサウジの時間の流れ、人々の慣習というものがあります。優先順位が違うというのでしょうか、面会の最中に、同僚や知人が訪れると私をそっちのけで、丁重にそちらと挨拶を交わしますし、電話が鳴れば電話にでてしまいます。また、一日に五回あるイスラム教のお祈りの時間になると、またしても私を放っておいてお祈りに行ってしまうこともあります。「いつまでにその仕事の返事がもらえるんだ」と聞いても、「来週ぐらい、インシャッラー（神のみぞ知る）」、一週間経って「返事が来ないじゃないか」と催促しても、「マーレーシュ（問題ない）」。「問題あるのはこっちだよ」と言いたくなりますが、これはアウェーでの戦い、相手がその気になってくれなければ物事は動きません。相手のリズムを理解しながら、どうすれば局面の打開が図れるか、そこが思案のしどころでしょうか。しかしこれは、悪気があっての態度ではなく、人そのものは素直で、裏表のある感じはしない人々です。

キングダムタワー

サウジはここ三十年の間に、砂漠のベドウィン（遊牧民）生活から一気に近代化しました。衛星放送、インターネット、情報公開、民主主義、グローバル社会、男女同権などイスラムの教えにも照らし合わせながら、どのように解釈すればいいのか思案しなければならない案件が増えています。石油輸入の四分の一を依存し、日本とは切っても切れないこの国が今後どう変わっていくのか、まだまだ面白い発見はありそうです。

（在サウジアラビア大使館）

# 「クラブ活動」今昔物語

ボート部顧問　加藤　和義（昭和52年卒）

「♪見上蒼溟に続きたる　波洋々の阿漕浦♫…」津高校歌と共に脳裡に刻まれている「津高端艇（ボート）部部歌」である。逞しい若者が、荒波を物ともせず、その肉体が滅びることも恐れずに、入魂のオールを漕ぎ続けている。少なくとも私にとっては、先達の生き様やボートに賭ける熱い思いをじかに感じることのできる文言であります。

一二〇年を超える津高の歴史の中には生きることが精一杯の時代があり、時流に翻弄されながら、クラブ活動が存続してきたものと推察致します。津高同窓会事務局には、津高の歴史を感じさせてくれる膨大な資料があり、クラブ活動の様子を伺い知れる写真に出逢う事があります。片手にオールを持ち、地べたに、すっくと立ち、白いシャツを着て自信に満ちた表情で威風堂々とした様は、その痩せた体軀からは、決して筋骨隆々と言えないのになぜか冒頭で語った逞しい若者がそこにいるのです。

私は今、教師として津高と関わりを持っており、自分の経験した事に加えて、身近な、例えば、津高の先輩方の歩んで来たものを今の生徒達に伝えることができればと苦慮しております。

「文武両道」言い換えると、「勉強とクラブの両立」は、生徒達にとって永遠のテーマではないかと思いますが、前述の先輩方の写真から発するオーラは苦しい時代をも生き、それを実現した者だけが発するものであることを伝えてくれます。私の高校時代は「勉強のできん奴は、クラブなんぞする資格はない。」と先生、先輩方からよく言われておりました。確かに私の周りには、それを実現していた人が多く存在していたと思います（私は資格のないままクラブをやっておりました）。

どちらが大事とかではなく、とにかく両方やって当たり前であるという鉄則の様なものであったと思います。

近年生徒のクラブ離れを実感致します。

「中学校でやり尽くした」
——燃え尽きたのでしょうか——
「勉強面が心配だから」
——かと言って勉強以外にやりたい事はないのかな——
「親にやめる様に言われて」
——自分の意志はどうなの——

若者には得体の知れないエネルギーが宿っていて、それを何に使えばいいのか苦悩する時期があると思います。そのエネルギーを眠らせることなく、打ち込めるものに向かわせること。短い高校生活の一片のクラブ活動の時間にそのエネルギーを注ぐことが、その後の人生を大きく変えることと信じて止みません。

本年度の部活動加入状況を掲載致します。日頃の先輩方のご支援感謝致しております。

## ◎ 部活動加入状況 ◎

（2004年5月2日）

| 部名 | 男子 | 女子 | マネ(女) |
|---|---|---|---|
| **運動部** | | | |
| 陸上 | 29 | 11 | 4 |
| 山岳 | − | − | − |
| 硬式野球 | 34 | 0 | 3 |
| 軟式野球 | 30 | 0 | 3 |
| 弓道 | 36 | 40 | 0 |
| バレーボール（男） | 13 | 0 | 0 |
| バレーボール（女） | 0 | 9 | 1 |
| 剣道 | 10 | 5 | 2 |
| バスケットボール(男) | 32 | 0 | 0 |
| バスケットボール(女) | 0 | 16 | 0 |
| サッカー | 53 | 0 | 7 |
| 卓球 | 23 | 10 | 0 |
| 体操 | 10 | 5 | 0 |
| ボート | 3 | 1 | 0 |
| バドミントン | 20 | 21 | 0 |
| テニス（男） | 47 | 0 | 0 |
| テニス（女） | 0 | 14 | 0 |
| ソフトテニス（男） | 18 | 0 | 0 |
| ソフトテニス（女） | 0 | 17 | 1 |
| ソフトボール | 0 | 15 | 1 |
| 水泳 | 6 | 10 | 0 |
| ダンス | 7 | 33 | 0 |
| ハンドボール | 7 | 0 | 0 |
| 小計 | 378 | 207 | 22 |
| **文化部** | | | |
| 文芸 | 4 | 8 | 0 |
| 美術 | 2 | 11 | 0 |
| 書道 | 0 | 12 | 0 |
| 音楽 | 14 | 28 | 0 |
| ホームライフ | 0 | 37 | 0 |
| 茶道・表 | 0 | 16 | 0 |
| 茶道・裏 | 0 | 17 | 0 |
| 電気 | 5 | 8 | 0 |
| 天文 | 5 | 11 | 0 |
| 化学 | 5 | 4 | 0 |
| JRC | 0 | 10 | 0 |
| Jr. Com | 1 | 17 | 0 |
| クラシックギター | − | − | − |
| 国際交流 | 1 | 11 | 0 |
| 軽音楽 | 18 | 6 | 0 |
| 邦楽 | 0 | 10 | 0 |
| 将棋 | 10 | 8 | 0 |
| 写真 | 0 | 9 | 0 |
| 放送 | 8 | 2 | 0 |
| 吹奏楽 | 3 | 36 | 0 |
| 新聞 | 1 | 4 | 0 |
| 応援 | − | − | − |
| 図書 | 3 | 9 | 0 |
| 小計 | 80 | 274 | 0 |
| 総計 | 458 | 481 | 22 |

# 津高校進路事情

進路指導部　川口由生

新しい学習指導要領に基づく教育活動が始まり二年目を迎えました。今回の学習指導要領の改訂においては、「ゆとり」のなかで自ら課題を見つけ、考え、解決する力を育み、「生きる力」を身につけることが重視されていますが、学習内容や授業時間数が大幅に減少したことなどから、「学力の低下」を心配する声も多く聞かれます。また文部科学省は一方では緊急アピール「学びのすすめ」を出して「確かな学力の向上」を謳っています。

このような状況の中で、授業の充実と授業時間数の確保のために、一昨年四月より六十五分授業・二学期制を導入し、年間授業計画「シラバス」を作成し、生徒全員に提示し授業の精度を高め、計画的な「自学自習」を促す工夫をしています。また、二年次に類型別クラス編成（類型Ⅰは文系、類型Ⅱは理系）を行い、より一層細やかな進路指導ができる体制をとっています。

さて、本校では大多数の生徒が四年制大学への進学を希望していますが、大学の変化の速さには進路指導部も驚かされる日々です。国立大学の独立行政法人化や、法科大学院構想など次々と新しい動きが現実化しています。平成十八年度の大学入試センター試験では、リスニングテストの導入が決まりましたし、またAO入試に代表されるような、大学ごとの入学者受入方針（アドミッションポリシー）に即した高度な問題や、「生きる力」を求めた思考力・総合力・問題解決力を求める入試問題などが増加しています。こうした大学全体の「流動化傾向」はますます顕著になってきています。

進路指導部としましても、大学入学までの指導にとどまらず、大学入学後に学ぶ分野やその学び方、更には将来の職業まで視野に入れて、大学・社会の環境変化に対応し、生徒の進学に対するモチベーションを高めるための工夫が必要だと考えております。

そのような考え方に基づき、数年前より「全ての生徒の願いを叶えるために」をスローガンに、学習指導・進路指導の両面にわたる三ヵ年のガイダンス計画を策定しています。面談週間（四月・十月の二回）を設ける一方で、「なりたい自分をみつける」ために、「自分探し事始め」を企画してきました。

この企画の第一の柱は、生徒自身が学校を飛び出して積極的に現場を体験する「ミニ・ツアー」です。一つ目の「名古屋大学大学院理学研究科　菅島臨海実験所訪問」では、ウニの発生や海の生物について体験的な学習をさせていただき、二つ目の「三重大学医学部医師体験」では、医療現場を実際に体験することができました。

企画の第二の柱は、「大学の模擬授業・説明会」及び「文化講演会」です。五月には三重大学工学部より助教授の飯田和生氏（昭和49年卒）と、森香津夫氏（昭和57年卒）をお招きし同大学の電気工学科の説明と電気工学についての講義をいただき、七月には一年生対象に弁護士の中山正隆氏（昭和44年卒）より「弁護士への道」と題する講演をいただきました。さらに津税務署に勤務されている中井克明氏（昭和59年卒）に「公務員について」体験談をしていただきました。これらの企画は皆、生徒の進路選択や学習への動機づけとなる絶好の機会となりました。また本年度は更に、十二月に東北大学大学院工学科教授の粉川博之氏（昭和45卒）の講演を計画しております。

そして企画の第三の柱として、来年二月から三月にかけて「学部別・大学別の受験座談会」を予定しております。例年のことながら、これらの企画には、講師の先生方はもちろん、その準備段階におきましても、多くの同窓生の皆様に大変お世話になっており、卒業生の方々が多方面でご活躍なさっているありがたさを身にしみて感じております。

ところで、今年三月の進路状況の報告ですが、国公立大学の合格者は約二百八十名でした。現役生の頑張りと、再度挑戦した過年度卒業生達の努力の結果であると思います。国公立・私立とともに関東方面への進学者が徐々に増加してきたこと、海外の大学を目指す者も少なからず見受けられることが最近の傾向としてあげられます。

最後になりましたが、進路指導部の目標は、①ひとりひとりの願いを大切にする、②データを活用した進路指導を行う、③自らの能力・適性について考え、大学で何を学ぶか、社会に出てからどんな職業に就くのかを明確にすることによって自らの高校生活を考える、の三点です。卒業時に生徒全員が「津高校で学べてよかった」と思えるよう、頑張っていきたいと思います。

どうか同窓会の皆様の従前と変わらぬご理解、ご協力をお願い申し上げます。

（大学合格者数）

| | 国立 | 公立 | 私立 | 短大 |
|---|---|---|---|---|
| (2004) H16年 | 246 | 41 | 811 | 11 |
| (2003) H15年 | 214 | 54 | 681 | 11 |
| (2002) H14年 | 244 | 49 | 749 | 12 |
| (2001) H13年 | 173 | 34 | 572 | 14 |

（主要大学合格者数）

| | 北海道 | 東北 | 筑波 | お茶の水 | 東京 | 一橋 | 東工大 | 東京外大 | 横国大 | 静岡 | 金沢 | 信州 | 名古屋 | 名工大 | 名古屋市立 | 三重 | 県立看護 | 京都 | 大阪 | 大阪外大 | 大阪府立 | 大阪市立大 | 神戸 | 奈良女 | 広島 | 慶応 | 早稲田 | 上智 | 青山学院 | 中央 | 東京理科 | 日本 | 明治 | 法政 | 立教 | 南山 | 名城 | 皇学館 | 龍谷 | 京都産業 | 同志社 | 近畿 | 立命館 | 関西 | 関西学院 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (2004) H16年 | 8 | 2 | 3 | 2 | 6 | 2 | 1 | 0 | 7 | 13 | 12 | 8 | 25 | 10 | 10 | 65 | 0 | 6 | 12 | 6 | 6 | 5 | 4 | 2 | 1 | 23 | 24 | 4 | 10 | 12 | 23 | 6 | 11 | 9 | 4 | 57 | 39 | 16 | 18 | 12 | 50 | 31 | 132 | 57 | 19 |
| (2003) H15年 | 3 | 0 | 3 | 1 | 4 | 1 | 2 | 0 | 9 | 11 | 5 | 7 | 23 | 9 | 8 | 63 | 1 | 10 | 9 | 0 | 7 | 2 | 6 | 2 | 0 | 11 | 20 | 10 | 2 | 9 | 19 | 15 | 7 | 7 | 1 | 49 | 35 | 19 | 18 | 13 | 42 | 36 | 101 | 37 | 30 |
| (2002) H14年 | 3 | 4 | 9 | 1 | 2 | 1 | 2 | 0 | 6 | 10 | 13 | 10 | 32 | 9 | 7 | 63 | 4 | 10 | 6 | 0 | 6 | 8 | 7 | 4 | 12 | 8 | 28 | 1 | 10 | 17 | 14 | 14 | 18 | 14 | 5 | 65 | 32 | 15 | 17 | 5 | 56 | 35 | 118 | 36 | 21 |
| (2001) H13年 | 2 | 1 | 6 | 2 | 4 | 2 | 1 | 2 | 2 | 8 | 3 | 6 | 22 | 5 | 7 | 48 | 3 | 6 | 15 | 2 | 3 | 3 | 7 | 1 | 0 | 12 | 30 | 3 | 12 | 8 | 6 | 5 | 9 | 10 | 1 | 52 | 37 | 13 | 9 | 5 | 29 | 26 | 77 | 33 | 16 |

# 修学旅行

2年8組　牛場翔太

十月二十日正午、僕たちは遂に北海道の大地を踏んだ。太陽は高く昇っていたが、まだ肌寒く、ここが北海道であるということを肌で実感した。北海道到着の興奮もさめないうちに、僕たちは最初の目的地支笏湖を目指して、バスに乗り込んだ。

支笏湖では、みんなで写真を撮った後、自由行動になった。僕たちのグループはアヒルボートに乗り、湖の上で自由な時間を過ごした。水は冷たく、湖はとても綺麗だった。魚がいるのでは、と探したが、見つからなかった。ボートの後は名物のじゃがバターを食べた。

旅行の前から、必ず食べたいと楽しみにしていたものだった。じゃがバターはほんのり甘く、夕張メロンソフトも超おいしかった。お腹を一杯にして、次の開拓の村へと出発した。

日も暮れ、ますます寒くなり、お腹もへってきた頃に、夕食会場アサヒビール園に到着した。夕食はジンギスカン！見た目は予想と違い、ハムのような形に切られていた。指示された通りに焼いて、一口食べてみると、鼻をツンとつく臭いに驚いた。最初は、すごく変わった味のする肉だと思ったが、食べ続けるうちに臭いにも慣れ、おいしいと感じるようになった。女子も、ジンギスカンが美容に良いと知り、張り切って食べていた――気のせいかも知れないが……。ということで、お腹いっぱいのまま藻岩山へ向かった。

藻岩山からの夜景は、本当に宝石を散りばめたようだった。空気が澄んでいたため、様々な色のライトが、どこまでも光輝いていた。この夜景を眼に焼きつけ、藻岩山をあとにした。

北海道最終日、僕たちは白老アイヌ民族博物館へと出発した。博物館の入り口には大きな像が立っていた。その巨大な像の前で集合写真を撮った後、ムックリの製作体験をした。前で演奏してもらったムックリの音は「プユーン」と今まで聞いたことのない、奇妙な音をしていて驚いた。ムックリを作り練習したが、結局、上手く音を鳴らすことはできなかった。製作体験を終え、アイヌの人々の踊りを見たあと、博物館を出発し、千歳空港へと向かった。

北海道での三日間は、本当に楽しかった。どの一日をとっても忘れられない一日だったと思う。またいつか同窓会で、修学旅行の話をし、またいつか、友人と共に、北海道を訪れたいと思った。

# 各地で同窓会開催

## 東京同窓会

東京同窓会は、五月二十二日に東海大学校友会館で開かれました。本部から川喜田会長、長谷川副会長、事務局の佐々木様、白井教頃、恩師の鈴木茂、千草嘉夫両先生を来賓にお迎えし、総勢一四〇名を超える盛会でした。加藤会長、来賓のご挨拶に続き、校歌斉唱、新入会員紹介と代表のスピーチで総会を終えました。

今年のテーマは『出逢いと語らい』。卒業年別で歓談というパターンを第一部「同期会の時間」とし旧交を暖めた後、全員が橋北地区・橋内地区…と出身地区別のテーブルに移動、第二部「年代をこえた地域別懇親会」にプログラムを切り替えるのが新企画でした。

宴会途中の席替えは混乱するとの意見も出ましたが、加藤会長、ご来賓、出席者様のご協力でスムースにすすみ、且つどのテーブルでも年代をこえた和気あいあいの歓談で大いに盛り上がり、デザートに手を伸ばすのを忘れる程でした。最後に、来年度の運営を33年卒組に託して「ふるさと」の合唱で幕を閉じました。

第二部の開始に際し田口和子様（昭和32）の語り「阿漕平治説話」が会場の心を一つにし、郷里からの同期支援隊が学年代表の皆様と協力して牽引役を果たしてくれたことなども新企画成功の鍵でした。

加藤会長はじめ皆様から「今回は新しい出会いがあり、参加して良かった」という声が多く寄せられました。

## 九州同窓会

第十五回津高九州同窓会が五月三十日(日)福岡国際ホールで開かれました。本部より新会長の川喜田貞久氏（昭和27）・水越学校長・事務局の佐々木(氏)とし子氏（昭和45）をお迎えして、和やかな会を持つことが出来ました。

鈴木会長の挨拶の最後に、我らの元会長の樋川氏の冥福を祈って黙祷を捧げました。

川喜田会長は九州同窓会の会員数が少なく、出席者も少なくて二度ビックリだとの第一声でした。津の観音様に

五重塔が建設され、全体が綺麗になったとの紹介がありました。

校長先生からは、国公立進学が教育の目的ではないが、そのトップを四日市と津で競っている事や、学校の校舎も建て変わりつつある様子を話していただきました。

会員談話は三好益生氏（昭和37）が「行政から見た食の安全について」と題して、鳥インフルエンザとBSEに絞って身近な話題を資料に基づき詳しくお話いただきました。

福井副会長の音頭で乾杯、楽しく会食、懇談いたしました。校歌斉唱の後は、稲垣副会長の挨拶で散会しました。

## 名古屋同窓会

平成十六年九月十一日（土）夕刻、名古屋東急ホテルにて十六年度津高名古屋同窓会が、百三十七名の同窓生を集め開催されました。

五時三十分より好評定番の講演会が始まりました。講師は津高昭和三十二年卒業の川喜田敦氏、陶芸家であり、二代目半泥子でもあります、また著書「半泥子と楽山堂」などで知られる初代半泥子の研究家としても著名です。演題は「初代半泥子の人物像」、奇才の陶芸家半泥子の人生を様々な角度から紹介、名家の生まれで後の百五銀行頭取もつとめられた、裕福な陶芸家すなわちお金のために作陶をしない、したがって三十点の作品もあれば、二百点の作品もあるとのこと。うなずきと笑いの中で楽しい講演会となりました。

その後、総会、懇親会へと進められ、年齢順のテーブルでの食事、歓談が持たれました。諸先輩の食欲も驚くばかりでビュッフェの料理はたちまち寂しくなる次第。後半は恒例のテーブル対抗津高クイズ、今年は難問にも関わらず、最年少テーブルが五問全問正解という快挙で優勝されました。会場から「ドーピングの検査を」という声が飛び、笑いのうちに和やかに散会、久々の友人達と二次会に向かう姿があちこちで見かけられました。

（昭和44年卒　高北幸夫）

## 京都同窓会

第三十八回津高京都同窓会は、秋晴れに恵まれ十月二十四日ホテル平安の森京都で開かれました。本部より山田副会長、竹林副会長、津高から水越校長先生、加藤先生のご出席を賜りました。中西幹事の司会のもと、中井会長の開会の挨拶、式次第にそって進行されました。水越校長先生のご挨拶に依りますと、過日の台風で水の為に生徒さんが家に帰れず学校に泊まられたとか、校長先生はじめ先生方のご奮闘を聞きびっくりしました。竹林副会長のお話しに一同笑い声が上がり会場も和みました。

懇親会では、全員母校の思い出等を語り会い楽しい一時を過ごしました。最後に中井会長の閉会の辞、継続は力なりをスローガンに、来年の再会を約束しておひらきとなりました。又、新春親睦会を一月二十日（日）に予定して居ります。皆様のご参加お待ちしています。おこしやす津高京都同窓会へ。

## 大阪同窓会

十月十七日（日）、二百余名の出席のもと、本部より川喜田会長、松井副会長、津高より水越校長、恩師の宮田、賞井先生をお迎えし天王寺都ホテルで開催しました。

会場には、今年九月に逝去された佐野前会長のご遺影が飾られ、奥田会長からの感謝の言葉と共に一同でご冥福をお祈りしました。

講演では、サントリー株式会社の藤川茂昭氏（昭和43年卒）より「健康油脂アラキドン酸の開発」と題し、脳の老化予防等の食品開発の話を聴講しました。

和やか雰囲気で懇親会が進み、いよいよプロジェクトの出番、今年は奥田会長と同期の33年卒が当番で「こころ豊かなひとときを」との思いをアトラクションや福引の景品に込めました。

津から応援にきてくれたコーラス隊「燦燦ズ」（33年卒を中心としたOB）が「少年の日」等を合唱。会場はコンサートホールに。

陳川、三重校、津高の校歌を熱唱した後、静かに「故郷」を斉唱。明かりを小さくした会場後方ではコーラス隊が美しいハーモニーを。

「来年十一月二十日（日）元気で」の思いを胸に散会としました。

坂本成彦（昭和33年卒）

## ★来年の各支部同窓会ご案内★

| 支部 | とき（平成十七年） | ところ |
|---|---|---|
| 東京 | 五月二十一日（土） | 東海大学校友会館（霞が関ビル） |
| 九州 | 五月二十九日（日） | 福岡国際ホール |
| 名古屋 | 九月　十七日（土） | 名古屋東急ホテル |
| 京都 | 十月二十三日（日） | ホテル平安の森　京都 |
| 大阪 | 十一月　二十日（日） | 天王寺都ホテル |

## お知らせ

平成十七年度　同窓パーティー

◎日時　平成十七年八月六日(土)
午後三時より

◎場所　津センターパレスホール
津都ホテル

担当学年幹事　昭和47年卒（代表　黒川　信行）
昭和59年卒（代表　東口　大介）

# 平成十六年度の総会・パーティーを終えて

実行副委員長　能仁　宏樹（昭和58年卒）

去る八月七日（土）、ホテルグリーンパーク津を会場に、平成十六年度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーが開かれました。当日の参加者は七六七名でした。

総会では、川嶋田同窓会長の挨拶に続き、水越学校長よりご祝辞をいただきました。来賓の方々のお名前の後で、今年九十九歳を迎えられます大先輩のご参加も紹介され、代議員会報告と続き、無事終了しました。

続いて、オープニングイベントとして、津高現役ダンス部によるダンスが披露されました。

竹林副会長の乾杯の発声で、いよいよパーティー・懇親会の始まりです。

本年度の大会テーマ「なつかしい出会い、あたらしい再会」のもと、パーティーを盛り上げる企画が続きました。

混声合唱三津会&アンサンブルT・O・Oのみなさんの美しいハーモニーに続いて、ブルーウィスカーズが昭和四〇年代のグループサウンズを演奏しました。次は名物先生紹介。音楽の小川三津先生。美術の森谷重天先生、そして今年九十六歳になられる書道の草野先生のお元気な姿に大きな拍手がおくられました。

次年度幹事学年の挨拶に続いて、校歌が斉唱され、和やかな雰囲気の中、パーティーが終了しました。

# ～平成十七年度同窓パーティー案内～

## 笑って　"いただきま～す"

実行委員会委員長　黒川　信行（昭和47年卒）

平成十七年度同窓パーティーは、昭和47年卒と昭和59年卒の学年が担当させていただきます。

計画にあたりまして、実行委員一同参加される皆様が少しでも喜んで頂けるものに致したいと、心を込めて準備を進めております。

さて、昨今「人間笑っこないと幸せが来ないんですね。貧乏神も病気も、笑わない人が好きなんです」という寂聴さんのおもしろ法話が話題になっています。来年の催しは、"笑いと健康"にこだわり、元気で健やかな人生を創造するための提案ができればと考えております。それでは皆様！おおいに笑っこ"いただきま～す"。

多数の皆様方のご参加を心からお待ち申し上げます。

## 昭和38年同窓会の開催について

日時　平成十七年一月二日
午後二時から

会場　ホテルグリーンパーク津
（アスト津六階）

連絡先
TEL〈059〉226－3007
保地まで

## 事務局だより

▼同窓会報四十二号をお届けいたします。前回よりメール便にて、同一家族で電話番号の同じ会員への会報の送付は一部にさせていただいております。一会員一部、ご希望の方はお申し出下さい。お送り致します。

又、メール便は郵政公社のように、転居した際の転送システムがありません。住所異動される際には、必ず事務局までお知らせ下さい。葉書・FAX・メールにて受け付けています。

▼事務局
月・火・水・金曜日
午前九時半～午後四時半

◎津高同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331

◎同、メールアドレス
tsukou-d@axel.ocn.ne.jp

◎津高同窓会ホームページ
http://www7.ocn.ne.jp/~tsukou-d/